

DEBUT 首長

岐阜県関市長 尾関 健治氏

教育こそ人材育成のカギ 高速開通、雇用拡大に期待



おぜき・けんじ 1972年関市生まれ。96年早稲田大商卒、松下政経塾に入塾。2000年から民主党本部勤務。07年から関市議を務め、2期目途中の11年9月に市長に初当選。趣味は読書、ジョギング。好きな言葉は松下幸之助氏の「大忍」「大欲」。39歳。

岐阜県関市 岐阜市に隣接し、古くから刃物作りの町として栄えた。現在もカミソリや包丁メーカーなどが集積。人口9万3000人。

——マニフェストで掲げた基本姿勢は？

マニフェストでは①市民の知恵と力を集め、一緒にまちを創る②貴重な税金を1円たりとも無駄にせず、「最小費用で最大効果」を生む行政をめざす③情報公開と説明責任を果たす、オープンで、フェアな市政——を掲げた。

財政状況をとってみても、関市も決して楽観視できない。どんな事業も限りある税金を使うのだから、優先順位をつけることが大事。納得まではいなくても、市民に置かれた状況をまず理解してもらえるようにしたい。

情報発信する上でインターネットは有効な手段の一つで、ブログは毎日更新している。市の広報誌を読むことが少ない若い人にはツイッター、フェイスブックも使って発信していく。

もちろん直接対話するのも大切だ。市内各地で車座集を開き、できるだけ出向いても行く。まずは合併した旧郡部を中心に回り、地域の課題や産業の話などをしていきたい。

——重要政策は？

子供の教育や、大人の生涯教育が重要だと考える。選挙戦で訴えたように市民の手で日本一幸せな町をつくる。「市民の手で」が強い思い。そのために教育が根本だと考える。関市の歴史や伝統文化を学ぶ生涯学習は公開講座に力を入れる。土台作りは責任をもってやる。そのために読書に力を入れる。働くとはどういうことか、小学校の頃から意識できる教育をする。基礎的な学力と学ぶ意味を早くから感じてもらうためのキャリア教育も大切だ。

——刃物を含め「ものづくりの町」のイメージをどう発展させる？

「刃物の町」はこれからも訴えていくが、ものづくりの町・職人の町として、例えばコンテストのような、技術ある若手が売り出していける場を考えたい。

「市民の手で」つくる町としては地域の経済の活性化と雇用の確保が大前提だ。隣接する美濃市と共同で、新たな工業団地を開発する準備を進めており、今年度は基本調査費用の予算をつけた。関市は東海北陸自動車道や、名神高速とつながる東海環状自動車道が通るなど、中部圏の物流網の要衝に位置する。工事が進む東海環状の西回りルートが開通すれば、さらに交通の便が向上するため工場誘致にも期待が持てる。

企業を関市に呼び込む上でも、質量ともに豊かな人材がカギを握る。関市からいろんな人材が育ってほしい。関市で生まれ育った若者が大学進学などでいったん大都市圏に出たとしても、いずれ戻ってきてくれるのが一番だが、東京や海外で活躍することになった際には胸を張って「関出身だ」と誇れるようにしたい。

(聞き手は

岐阜支局長 石井 良一)